

〔講演記録〕

第15回赤十字・国際人道教育フォーラム
「イスラエル・ガサでの人道危機と赤十字の活動」

日時：令和6年4月24日（水）

場所：日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学

川瀬 佐知子

The 15th Educational Forum for Red Cross and International Humanitarian:
“Humanitarian crisis in Israel and Gaza, and the Red Cross’ activities”

Sachiko KAWASE

受理日：2024年8月21日 掲載決定日：2024年10月31日
大阪赤十字病院 看護部
Nursing Department, Osaka Red Cross Hospital

大阪赤十字病院の川瀬佐知子と申します。日本赤十字秋田看護大学・短期大学の学生の皆さん、聖霊学園の高校生の皆さん、先生方、皆さん、本当に今日は貴重な機会を頂きありがとうございます。私は、秋田に来るのは今回が初めてですが、このような機会を頂き感謝しています。

私は去年7月からガザで活動をしていました。10月7日の衝突が起こる前のガザのことも含めて、事業のこと、そして、現地でどのようなことが起こっていたのか、現地の方々の声を皆さんにお伝えしたいと思います。

ほとんどの方がテレビや新聞、学校の講義等、いろいろな所でこの話を聞いたことがあるかもしれませんが、最近、テレビで見ることがほとんど無くなりましたよね。私自身もテレビをつけていても、なかなか、もう目にすることが無くなって、本当に人の記憶の中から忘れ去られてしまうのではないかという恐怖というか。今、世界で何が起きているのか、イスラエル・ガザで何が起きているのか、是非、もう一度、考え直すきっかけにさせていただけたらと思います。

今からお話しさせていただく内容は、赤十字とはどういう組織なのかということです。赤十字の組織はご存じだと思いますが、今回のガザでの事業に当たって、少し説明を加えさせていただこうと思います。ガザ地区での活動と現状、そして最後に、今、私たちにできることが何なのかというのを、皆さんと一緒に考えたいと思っています。

私は看護師になって20年以上経ちます。元々、国際救援活動がしくて看護師を目指しました。2009年に国際救援の要員として登録されて、幾つかの国々で活動させてもらいましたが、事業に関わるだけでなく、いろいろな方々に会って、いろいろな人とのつながりができて、これは本当に国際救援ならではの人のネットワークが広がったなと思っています。

これは、バングラデシュで活動していた時の写真です。年齢的にもお父さんぐらいの年齢で、ずっと一同僚として働いていましたが、7カ月が終わり自分の仕事の期間が終わった時に、モホシン先生が「仕事として、同僚としての期間は終わった。今からは、おまえのことを娘と呼んでいいか」と言ってくれて、そこから、本当に親子のような関係が今もずっと続いています。そのように、人とのネットワークが、ずっとどんどん広がっていきます。それも、国際支援活動の魅力の一つかなと

思っています。

その後、イギリスにも行って公衆衛生学を学びました。

ガザの活動に関しては、現地に行ったのは2023年7月からですが、実際は、その1年前からリモート支援活動をしていました。パレスチナ赤新月社との医療支援事業は2019年から始まっていました。現地に日本の救援要員を派遣して活動しましたが、コロナ禍で現地に行けなくなってしまったので、リモート支援という形で活動を続けていました。私は2022年からリモート支援で週1回、現地とつないでオンライン会議や研修を行っていき、コロナも落ち着いて現地の治安も少し安定しつつありましたので、2023年7月からガザで活動しました。それで、11月に緊急帰国となりました。

まずは、赤十字とはどのような組織かというのを、皆さんと一緒に考えていきたいと思います。皆さん、赤十字の基本原則をご存じですか。7つあります。別に当てないの、知っているという方、手を挙げてください。ありがとうございます。今から学ばれる方もいらっしゃると思いますが、これが、赤十字の創立者のアンリー・デュナンです。

このような真っ赤な世界地図はなかなか見ることはないですよ。この真っ赤な世界地図は何なのかと言いますと、この赤い所が赤十字です。ピンクの所、色が付いていない白い国の所もありますが、これが一体どういう国なのか。赤十字・赤新月社運動というのは、世界191カ国と地域に広がっていますが、その中でも、この赤十字を使う所、赤新月を使う所があります。この十字のマークがキリスト教をイメージするということで、イスラム教の国々では十字のマークは使えず、この赤新月のマークを使っています。この赤十字、赤新月も使えない、特にユダヤ教の国々はレッドクリスタルのマークを使っています。この3つが赤十字赤新月社運動の正式な標章になります。191カ国の地域にある赤十字・赤新月社運動は、1,600万人のボランティアが世界中で活動しています。それぐらい大きな規模の運動になります。

その中で、日本赤十字社のような各国赤十字社が、この191の国々にあります。日本赤十字社がどのようなことをしているか皆さんご存じですか。日本赤十字社は、例えば病院の運営や青少年のボランティア、献血の事業などを行っています。

そのような各国の赤十字社を支える立場にあるのが、この国際赤十字・赤新月社連盟です。私たちは連盟と呼びますが、この連盟は、主に各国赤十字社のサポート役や災害発生時に指揮を取って活動の調整を行っています。もう一つが、赤十字国際委員会、ICRCと呼ばれる組織です。これは、武力紛争などで主に保護や救援活動を行っています。この3つが、大きく分けて赤十字の仕組みとしてありますが、この3つは、ばらばらに活動するわけではなく、さまざまな分野で、さまざまな状況で、協力しながら活動をしています。これをまとめて、国際赤十字・赤新月社運動と呼びます。

この3つの組織の活動の原則となるのが、赤十字の基本7原則になります。7原則は、人道、公平、中立、奉仕、単一、独立、世界性の7つです。今回、私がガザで活動している時に、一番重要になってくるのは、もちろん人道ではありますが、非常に難しかったのが中立という立場でした。イスラエル・ガザ地区で衝突が起こってから3週間半、赤十字国際委員会と一緒に活動しましたが、中立を守って活動するということが非常に難しかったです。具体的な内容については、皆さん、見ていただけたらと思いますが、必ずこの7原則に従って活動を行っています。

先ほど、日本赤十字社はどのような活動をしていますかと伺いましたが、全部で7つです。国内災害救護、国際救援活動、医療支援、赤十字ボランティア、それと看護師の育成。ここもそうですね。秋田赤十字看護大学・短期大学もその一つかなと思いますが、人材育成、福祉、血液事業などを行っています。

私は大阪赤十字病院から来ました。全国にたくさん病院はありますが、その内の5つが国際医療救援の拠点病院と呼ばれています。拠点病院が何をするのかと言いますと、人材育成やいろいろな研修、あとは例えば緊急支援があった時に、真っ先に現地に要員が派遣できるように準備を整えています。大阪、東京の医療センター、名古屋、熊本、和歌山と、5カ所の拠点病院がありますが、大阪は国際救援活動にすごく力を入れていまして、学生の皆さんが参加できる研修等もありますし勉強会等もやっています。今回、能登の地震に関しても、1月1日に発災して2日には現地にスタッフを派遣していました。

私は、大阪赤十字病院に就職してから20年以上ずっと働き続けています。その中で、いろいろな

研修を受けさせてもらったり、他の要員とも経験などを共有し合って今まで国際救援活動を続けてきました。

今回、2023年の7月からガザ地区に派遣されました。それでは、今からガザ地区での活動と現状についてお話しさせていただこうと思います。

この写真ですが、皆すごくいい顔をしていないですか。実はこの写真は、去年の7月に現地に着いた時に皆で撮った写真です。私は2022年からリモート支援をしたので初めて会うのですが、オンラインでパソコン越しですけれども、現地の人たちと何度も顔を合わせていたので、全然初めて会った感じがなくて、懐かしいような思いがすごくありました。

現地の人たちも、いつ日赤が現地に来てくれるのかとすごく心待ちにしてくれていて、やっと会えたという思いがすごくあって、今から現地での活動を一緒に皆で頑張っていこうと話していた時でした。

まず、ガザ地区がどこにあるかご存じですか。日本がここです。私は、まずドバイで乗り換えをしガザに入りました。イスラエルからガザに入るのですが、イスラエルまではスムーズでしたが、ガザに入るのがとても難しかったです。

皆さんにガザの大きさをイメージしていただくために、まず秋田県の地図を出してみます。これは皆さん、見慣れた地図ですかね。これが秋田全体だとすると、横のこれがイスラエルです。ここにガザがあります。縮尺が20キロで一緒の縮尺なので、秋田をイメージしていただくとガザ地区がすっぽり入るぐらいの大きさです。小さいですか。思ったよりも大きいですか。これぐらいの地域で一生過ごされているわけです。

この周りを、6メートルに及ぶ高い壁がずっと囲っており、自分たちで自由に出入りができるわけではなく、外から入って来られるわけでもない。家族と親戚がガザの外にいたりすると、一生会えないような家族もたくさんいると言っていました。

私はこれを見て、このガザのイメージは秋田県の海岸沿いと少し似ているのかなと思いました。ここが地中海ですが、ガザは地中海に面した地区になります。ガザ地区とヨルダン川西岸地区、この2つを合わせてパレスチナ自治区になります。この地図でいくと、ここがガザ地区、こちらがヨルダン川西岸地区です。この人口は、ガザ地区だ

けの人口ですが、その地域に220万人が住まれています、その内の170万人がパレスチナ難民といわれる方です。99%がイスラム教です。検問所が2カ所しかなくて、人と物の出入りも、生活のインフラ、電気や水などの制限もかなりあります。日本でも、夏のすごく暑い時に計画停電のようなのがあったと思いますが、ガザではずっと計画停電をしており、8時間ごとのオンとオフを繰り返しています。ひどい時は4時間ごとに計画停電があります。夏のすごく暑い時に計画停電の時間が来ると電気が全部止まってしまうので、扇風機もクーラーも全部止まってしまうという生活でした。

インフラだけではなくて、ガザの外に出て教育を受けることもできないですし、誰か外から人を呼んで教育をしてもらうこともできません。失業率も50%に近いのです。

治療に関しては、例えば悪性腫瘍などで抗がん剤や放射線治療が必要になったとしても、ガザの中では治療をきちんと受けられる所がありません。ガザの外に出ないといけませんが、誰もが国境を越えられるわけではないので、放射線治療が必要な場合は治療を断念するしかないという状況でした。そのように、いろいろな制限がある中で生活ということで、「天井のない監獄」とガザは呼ばれていました。

パレスチナ難民の背景というのは本当に複雑です。皆さん、何か読まれたことがあるでしょうか。中東の地域に関しては、私もすごく苦手意識があるぐらい、本当に複雑な歴史があるのです。この茶色い所が全部、1946年にパレスチナと呼ばれていたエリアです。1947年にパレスチナの分割決議というのがあり、このエリアをイスラエルとパレスチナの2つに分けたのです。分割決議ということで、そこから現地にも平穏が来るのかなと思ったら、イスラエルが建国され、ここに住んでいたパレスチナの方々が、皆、難民となって、周りの国々に移動しました。こういう長い歴史があって、パレスチナ難民の方々は、本当に大変な生活を強いられてきました。私も、ガザに行くまでは、ガザの人たちがどういう生活をしているのか想像がつかないというか、本当に大変な生活を送られているのだろうなと思って現地に行ったのですが、このような穏やかな風景でした。

このように、ロバが道を歩いていたり、ヤギで渋滞が起こったり、子どもたちが走り回っていた



り、にぎやかな光景というのは本当に当たり前の光景でした。地中海のほうに行くと、少しおしゃれなカフェやレストランがあって、そこで、おしゃれなジュースを飲んだり。私が7月に行ってから普通にしていました。



町を歩いていると、ガザの人たちはすごく親日的です。「どこから来たの」と声をかけられて「日本から」と言ったら、それだけで「来てくれてありがとう」「ガザに来てくれてありがとう」と、すごく言ってくれて、この焼いたパンというかお菓子をくれたりします。意外に物も揃っていて、スーパーには、いろいろな種類のフルーツや野菜があり、大体の物は手に入ります。日本のスーパーぐらい、いろいろ手に入ります。地中海に面しているのも、魚がたくさん捕れて、シーフードレストランに行ったら新鮮な魚を食べたり、そういう生活を送っていました。

これがガザの地図ですが、この少し北のほうにあるこの辺がガザ市といわれる少し大きな町ですが、ここにあるアルクッズ病院という所で私は活動していました。

大体200床ぐらいの病院で、看護師は80名です。少ないと思わないですか。私は80名と聞いた時びっくりしました。政府の方針もありましたが、



前の年に、びっくりするぐらいの大規模な人事異動があり、スタッフの約半分が病院を辞めさせられて、一気に看護師の数が減り病院の中は、てんやわんやの状態でした。

一般外来、一般病棟、産科や透析ができる設備もあります。大きな心臓の手術ができるような設備もあったり、心臓カテーテルの検査、治療もできますし、集中治療室、新生児の集中治療室というの也有ります。ただ、設備は整っていますが大きな問題が1つありまして、物が壊れると備品が届かないのです。検問所を越えて搬入しないといけないのですが、それができなくて、例えば、心臓カテーテル検査に関しては、1つの物が足りず10カ月ぐらい治療ができないということが普通にありました。

私が行っている間にカテーテル検査ができるようになりましたが、一度に患者さんがどっと来て、それで病院もバタバタしていました。新しい治療が急に始まったり急に止まったり、そういうことがしょっちゅう起こっている状況でした。

これが手術室です。寄付などで成り立っていることが多いのですが、日本の手術室を思わせるような、何でも設備は整っていて、病院のロビーも



とてもきれいに掃除が行き届いている感じでした。

これがパレスチナ赤新月社医療支援事業のコアチームメンバーです。



大阪赤十字病院からは、私ともう1人、大阪赤十字病院の新生児の集中治療室で働いている助産師さんと看護部長です。本当に頼りになる看護部長で、私は、毎日、看護部長の部屋に行っては、一緒にアラビアのすごく濃いコーヒーを飲んで、今後の教育方針などについて、いろいろ話し合ったりしていました。

こちらの2人が現地の看護師さんです。一番奥の方がハムディー。ハムディーは私と同年で、看護師歴は20年以上で、看護師だけではなくいろいろコーディネーションも行ってくれる、本当に頼りになる、ずっと事業を支えてくれている看護師さんです。その隣の看護師さんがハッサン。ハッサンは28です。すごくエネルギーがあって「何でもやります」と、前向きに、積極的に活動に関わってくれていました。

現地での事業目標が、アルクッズ病院における医療サービスの質の向上ということで、教育体制があまり整っていなかったなので、まず教育体制を

整えるところから行いました。教育委員会を立ち上げたり、そこから看護実践力を向上させるためにどうすべきかということで、例えば、バイタルサインの測定、血圧測定や脈の測定など基礎的なところから、点滴の管理や酸素の管理、褥瘡（じょくそう）予防など看護の手順書のようなものを作って、私が現地に派遣された時から、現地でのOJT、実務訓練を始めようかと言っているところでした。

現地で子どもがたくさん生まれますが、やはり現地の方々の栄養状態や生活環境からすごく未熟児が多いのです。NICUのベッドは常に未熟児の赤ちゃんで埋まっているような状態だったのですが、なかなか訓練を受けた看護師さんがいなくて、NICUの看護師さんの教育も積極的に行っていました。

現地の幹部の職員さんに対して、これから事業をこのように進めていきますというのを説明している会議です。これが8月の終わりぐらいです。

これは、褥瘡のトレーニングをしているところです。体位交換です。



これは、NICUの赤ちゃんのケアについて教育をしているところです。



パレスチナ赤新月社は、ガザでいろいろな役割があって、救急車のサービスも行っていましたし、アルクッツ病院自体もパレスチナ赤新月社が運営する病院の一つでした。ボランティアもたくさんいて、本当に活発に活動しています。

あとは、ICRCが活動をしていました。ICRCは、主に紛争下での活動をしていますが、日本赤十字社もガザでの活動は紛争下ということでICRCの安全管理の下、行います。ですのでICRCの宿舎で寝泊まりをしていました。

皆さんがテレビでガザのことを見られる時は、家が倒壊したり、傷ついた子どもたちや大人が映っている映像がほとんどだと思いますが、そうではなくて、平穏なガザを私はずっと見てきていて、それが10月7日に一度に全てが変わってしまったことに、私は本当にすごい衝撃を受けました。皆さんにも、平和だった頃のガザを見ていただきたいと思いこの動画を準備しました。

日本でもありそうな光景かと思いますが、このような普通な光景がありました。皆が集まってお祝いをしてくれるという、本当に家族の一員のように対応してくれていました。ガザは小さいので人はすごく多いですが、エリアが限られているので、現地で活動するNGOのスタッフなども、大体、顔見知りで、このように皆で集まってバレーボールをしたりしていました。

10月7日は土曜日ですが、10月6日の金曜日もお昼から皆でバレーボールをしていました。イスラムの国はお酒は飲めないのも、バレーボールが終わった後に皆でジュース屋さんにジュースを飲みに行って、普通の金曜日を過ごしていました。普通の土曜日が来ると誰もが思っていた矢先、10月7日に突然の衝突が起きました。私は宿舎で寝ていました。朝の6時半前ぐらいだったと思います。大きな音がしたので、それで目が覚めて、しばらくじっとしていました。そういう爆撃の音というのは初めてではなくて時々あるのです。小規模なデモなどもありますし、何かをお祝いする時にお祝いの花火を打ち上げたりもするので、今回もその一つかなと思っていましたが、どんどん攻撃が激しくなって行って、全然、爆撃音がやみませんでした。これは普通ではないと思って、すぐにICRCに連絡を取ったり、現地のスタッフと連絡を取ったりして、何が起きているのか、いろいろな情報を取りましたが、花火ではない、小規模なデモではない。大体、こういうことが起

こった時は、現地の人たちのほとんどは、事前に情報を持っていて「あれはこういう理由だから」というのをすぐ教えてくれるのですが、現地のスタッフも、全然何か分からないということでした。これは何か危険な、大規模なことが起こっているということで「すぐに退避になるかもしれない」と言われ、荷物をまとめて、いつでも、すぐに移動できるようにしていました。

現地、アルクツズ病院の方に行こうと思いましたが、セキュリティ上行けないことは分かっていたので、現地の看護部長さんに連絡を取りました。「私、病院のことが気になって」と言うのと「病院には来ないほうがいい」「こんな危険な状態で、多分、これはただごとではないから。自分たちはこの状況には慣れているから大丈夫、来ないでいい」と言われました。私は連絡を取り続けて、私自身も何が起きているか分からなくて、かなり不安も大きくて、とりあえずICRCの指示に従うことしかできないという状況が続いていました。

その中で、10月7日の数日後に救急車が攻撃を受け救急隊が亡くなったという報告が入りました。アルクツズ病院にもどんどん負傷者の方々が運ばれ、24時間体制のシフトを組んで対応していると、連絡を取り合っていました。国際人道法で守られるべき医療従事者、医療施設、一般市民の方々が対象になっているという、本当に厳しい状況でした。



私の同僚の方の子も負傷し病院に運ばれてきました。スタッフもそうですが、周りのスタッフもどう対応していいか分からず、かける言葉がなく、本当に、皆つらい中、それでも、また爆撃があったら負傷者が運ばれてきて、その対応をずっと続けていました。

病院には、どんどん避難民の方々が避難してきて、この中で生活していくのですが、病院には、

たくさんの避難民の方々に出すような水も食料も電気ありません。燃料がいつ尽きるか分からないので、必死で、どのように燃料を調達するかということも話し合っていました。

たくさんの方が集中治療室に入られていました。集中治療室に患者さんがいた時ですが、ガラスのところから患者さんが撃たれて負傷するなど、病院の中にも全然安全が確保できない状況が続いていました。

現地の救急隊の方が撮った動画を皆さんに見ていただこうと思います。これはアルクツズ病院前の道路ですが、この状況で、皆さん働き続けていました。後で看護部長と話をした時、いつ自分たちが爆撃を受けるかもしれないという恐怖を感じながら、負傷者の対応を続けるというのが本当に辛かったと言っていました。それでも、そこから逃げることなくずっと患者さんの対応をしてきたということに、私は驚きと敬意と医療従事者として本当に素晴らしい方々だということを感じました。

ガザ市の全域が攻撃を受けるという勧告があり「すぐに退避しなさい」と言われ、私も病院と連絡を取り合って、患者さんや病院の中にいる避難民の方々をどうするかなど話し合いました。避難民の方々だけでも1万5,000人ぐらいおられたと思います。

集中治療を受けている患者さんをどうやって別の場所に移動するのか。ここに病院がありますが、南部の方に移動するよう勧告がありました。全域で15キロぐらいです。しかし、車も燃料もなく、どうやって患者さんを安全に退避させるか、結局、その時は退避せず、病院の中でできる限りの治療をすると、病院院長と看護部長と皆さん決めて対応していました。しかし、とうとう燃料が尽き、酸素投与が必要でも酸素も無く、人工呼吸も使えず、もう何も治療ができません。更には、周りは爆撃をずっと受けていて、中に患者さんがいても、人がいても攻撃をするということを何度も言われて、最終的に11月14日に南部のほうに退避しました。

これが退避している時の様子ですが、ほとんど車も燃料もないので、このように皆で担架を抱えて順番に交代で患者さんを運びました。昼前ぐらいに出発し、夜真っ暗になって雨が降ってきても、まだ移動していたと言っていました。

南部に移動して安全が確保されるかというところ

うではなく、支援物資は入って来ず水も無く食料もありません。そういう環境なので、感染症が蔓延したり、呼吸器感染症や皮膚疾患もたくさん出ました。一度広まると、なかなか改善ができないので、何とか衛生環境を改善する方法がないかと、パレスチナ赤新月社のスタッフの方々もキャンプを回って健康教育を行っていました。

あとは不安定な通信環境です。私も、現地にいる時に、突然、電話が通じなくなったりして、日本の方々、家族にもすごく心配をかけました。今でも、突然、連絡がつかなくなります。現地の方々に何かあったのではと不安になったら「大丈夫、元気にしてるよ」と返事が返ってくるのが、まだ続いています。

自分や家族が攻撃を受けるのではないかという不安を、皆さん、ずっと抱えて生活されています。私自身は、現地でどのような活動をしたかといいますと、10月7日、元々、ICRCの宿舎に住んでいましたが、安全な場所を求めてICRCのチームと共に活動をしていました。

最初の数日間、怖くてたまらないというか、爆撃がずっと続いていて、明日は来ないかもしれないと毎日思いながら寝ていました。そのような環境で、10月13日に、ガザ市全域が攻撃を受けるという勧告があり、チーム全員で南部のほうに移動しました。移動したのが真夜中で真っ暗でした。車のライトが照らす所が、唯一、周りの景色が見える所で、見えた所は全部電柱が倒れていて、砂ぼこりが立ってがれきの山でした。この道を行こうと思っても、がれきの山で通れず、道を変えるということを何度もしながら、やっと南部のほうに移動した状況でした。

私は、10月7日から3週間半、日本に帰国するまで、ずっと日記をつけていました。10月13日、退避した時に書いた日記を少し読ませてもらいます。「ガザ市内は原形を留めていない。ついこの間、人だかりで盛り上がるガザの町とのギャップが、ギャップというか全く違う場所。道がブロックで通れない所、ライトがなく真っ暗になっていて、本当にこの世かと思うくらい、ひどい景色だった。このまま、現地のスタッフはどうなるのか。どうにか彼らも逃げるができるのか。逃げられなかったら彼らはどうなるのか。ハッサンは。ハムディーは。ほんまに冷静ではいられないストレス、恐怖」と、この時は書きました。

今、読んでみても、その時の気持ちが蘇ってく

るというか、本当に、この時は、自分が生きてガザから出られるのか、もう一回家族に会えるのか、現地の方々が助かるのか、自分のことにも必死でしたし、現地の方々がどうなるのか、それだけで頭がいっぱいでした。何とか奇跡的に、私はこうして無事に帰ってくることができましたが、現地では、まだまだ本当に大変な状況が続いています。

私が移動した所にもたくさんの避難民の方々がおられました。その避難民の方々の中には、今回の衝突で負傷し病院で手術を受けたけれども、その翌日に緊急退避することになったり、手術直後の傷のまま退避されていて、その傷の処置をしたりしました。

あとは、慢性疾患の患者さんがたくさんおられました。高血圧や糖尿病、心疾患、そういった方が、薬がなくて非常に困っておりました。そのお薬をどうにかして調達する方法をいろいろ考えましたが、なかなか調達できませんでした。というのは、病院も攻撃を受けてつぶれていたり、病院があってもスタッフが全然来られなかったり、物が無かったりしました。更には、薬がそこにあるということが分かっている、行くまでに攻撃を受けるのではないかと、安全なルート確保のゴーサインが出ず行けなかったり、降圧剤1つ調達するにもこんなに大変なものかというくらい何日もかけて調達しました。糖尿病など薬を何日も飲んでいないと命に関わると思いますが、飲めていない方もたくさんいたと思います。

自分たちのチームの健康管理や住んでいたエリアではお医者さんがおらず、ICRCの看護師2人は別の任務があったので、私が、避難民の人たちの健康管理の担当をしました。皆、「ジャバニーズドクターはどこ？」と私のところまで訪ねて来てくれて、そこで対応しました。

日本では、私たちは医師の補助という立場で医師に「どうしましょうか」と聞いて、対応することがほとんどですよね。看護師1人で判断して「はい、このお薬を飲んでください」ということは、日本ではほとんどないと思いますが、現地ではその繰り返しだったので、すごくストレスを感じていました。塗り薬1つにしても、これで合っているのかなど日本では感じないようなプレッシャーをずっと感じて健康管理を行っていました。

最初は、もうガザから出るしかないのか、出るためにどうするのかというのを考えていましたが、ある日、その考え方が180度、命をつなぐ活

動へと切り替わりました。

チーム会議のようなことを毎日やっていましたが、ICRCのチームリーダーが10月7日の夕方、最初に「今は人道支援が不可欠な状態」と言ったのです。「何とか退避する」と言うと思ったら、そうではなくて、人道支援が必要な状況と皆に言ったのです。

その時は、私はまだじっくり来ていませんでしたが、数日経ち自分の心にも余裕ができ、書いていた日記を見た時に「そうだ。自分がここにいるのは退避するためじゃない。この状況で、ここにいる人たちのために人道支援を行う、そのために自分はいるんじゃないか」とすごく思いました。

このチームリーダーの言葉がなかったら、今でも全然違う活動をしたのではないと思うぐらい、本当にはっとさせられた言葉でした。退避ではなくて、紛争下でいかに活動を継続するか。退避するよりも更に危険を伴う可能性がありますよね。その中で、車を走らせて物を運んだり、患者さんの対応をするのです。いかに安全管理を行うかという安全管理の徹底です。正しい情報、どのルートで行けばそこに安全に辿り着くのか、今、安全に辿り着けるのか。安全という言葉は、状況とは合致しない言葉かもしれないですが、より安全な状況、情報収集というのは、安全管理という視点でも本当に大切です。

あとは、現地スタッフへの配慮です。チームが力を発揮できる時というのは、チームが一丸となって一つのゴールを目指して活動できる時だと思います。現地スタッフには自分の家族もたくさんいますので、その家族の安全が保たなければ、現地のスタッフも自分たちの活動に注力できません。ですから、ICRCは現地のスタッフの安全も確保しながら家族の安全も確保し、いかにして活動するかというのをずっと話し合っていました。

あとはチーム力です。私は、国際スタッフだけで一緒に活動しましたが、日本人は私1人で他はいろいろな国々から来た11人のチームでした。このようなストレスの中、3週間半です。自分は生活できるのかと不安ではありましたが、いざ、そういう環境下になると皆で助け合って生活していました。

私も、精神的にも3回ぐらいストレスのピークがあって、涙が止まらない時もありました。私が部屋に隠れて涙を流していたら来てくれて「それは言ったらいいんだ。自分のストレスは、思っ

ていることは言ったらいい。言うことが、自分のストレスの軽減につながるんだ。言ったらいい」と、チームの皆が言ってくれて、それで乗り越えられたのではないかと考えています。本当に、お互いを労って励まし合って過ごした3週間半でした。もちろん、ICRCだけではありません。パレスチナ赤新月社は、ずっと救急車で負傷者の搬送をしていましたし、子どもたちへの心のケア、大人への心のケアもずっと行っていました。

エジプトからラファ検問所を経由して物資を搬入しましたが、搬入を許されていた組織がエジプト赤新月社とICRCとパレスチナ赤新月社でした。ですから、いろいろな所の物資を、エジプトの赤新月社のトラックに詰め込んで、ガザに搬入するというのが続いていました。今は他の組織も入っていますが、搬入が可能となった当初は、赤十字がメインの組織として物資の搬入等を行っていました。

イスラエルでも、負傷者、死者も出ていますし、イスラエルのダビデの赤盾社も負傷者の対応や避難民の対応を行っています。赤十字連盟もサポートしていますし、日本赤十字社も寄付金を集めたり、私が現地にいる間も個人的にもいろいろサポートしていただきました。

ICRCに関しては、人質の解放に関していろいろな調整をしていました。あとは、国際人道法です。国際人道法に関しても、初期の段階から何度も「国際人道法遵守の重要性について、双方に伝えた」ことをチームリーダーが言っていました。赤十字だからこそ、こういう、さまざまな厚みのある活動が現地で展開できているのかなと思います。

少し皆さんに考えていただきたいと思います。このように、明日が来ないかもしれないという状況をイメージすることは、なかなか無いと思うのです。もし、全てが変わってしまうとしたら、皆さんは何をしますか。少し目をつぶって1分ぐらい考えてみてください。

ありがとうございます。どのようなことが思い付きましたか。頭に浮かんできましたか。もしかすると、予定されているようなイベントなどがあったら頑張ろうなどと思われた方もいるかもしれませんが、普段の日常、例えば、家族に電話しよう、家族に会いにいこう、友達に会おうなど、そのようなことを思い浮かべた方もたくさんいると思います。誰もそうだと思うのですが、私もこ

のようなことが起こると思っていなかったの、いろいろな後悔があります。あの時、なぜ、あれをやらなかったのかなと。本当にすごく小さいことですが、10月17日に予定していた研修をもっと早くにしていたら良かったなと思いました。

私は現地でアラビア語を習い始めていました。アラビア語のレッスン料金1回幾らと払わないといけないのですが、細かいお金がなかったの、先生に「ごめんなさい、細かいお金がなくて」と言ったら、先生が「次でいいよ、次の時に2倍払ってくれたらいいから」と言ってくれて、その時払わなかったのです。しかし、次が来なかったのです。なぜ、あの時払わなかったのだろうと。そのような、ちょっとしたことかもしれないですけども、すごく後悔しました。ガザの人たちは、明日が来ると、皆、普通に考えているわけです。次の時でいいと。ですから、次が来るのが当然の状況で、しかし実は、それは当然ではないという、そのことを本当に今回感じました。

先ほど見ていただいたアルクッズ病院、私がずっと働いた所で、1月に、もし、この病院がまだ機能していたら、ここに帰って負傷者の受け入れをしたいと看護部長が言っていました。1月末に現地の調査に行った時の動画ですが、道路もかなりダメージが強くて救急車の搬送もかなり難しい状態です。病院の中はすすだらけです。皆さん、この状態を見てどう思いますか。私はこれを見て、ここで医療を再開するのは難しいかなと思いました。実は、これを見て、南部にいた看護部長が「アルクッズ病院は激しい損壊を受けた。でも、ガザ市に戻れたなら、1週間以内に負傷者の受け入れを開始するとあなたに約束する」と、私に言ったのです。現地の方々は、医療従事者として、いかに自分が活動するべきかというのを常に考えて、次に何ができるかというのを、どんどん進めていこうとしていました。看護部長ご自身も、爆撃で足を負傷されたのですが「自分は動けないけれども、その分、避難民キャンプなどを回って、ファーストエイドのトレーニングをしていた」と言っていました。「すごい人だな」としか言葉が出ないぐらい、けがをして休むのではなくて、常に、今、何ができるかというのを考えて活動されていました。

少し、現地のスタッフの言葉を皆さんにお伝えしたいと思います。これは、ハッサンです。28歳の救急の若い看護師です。WhatsAppという、

LINEのようなメッセージアプリでやりとりする時に、彼は、いつもメッセージの最初に「まだ大丈夫」「Till now, I'm alive」というのを入れます。



私も、この言葉は本当によく分かります。ガザにいた時、私もよく日本の家族に「大丈夫。今、まだいける」のような感じで送っていました。それはなぜかと言うと、周りが爆撃されているのを見ていると、今、何が起こってもおかしくないというのをすごく思うのです。明日は、本当に目が覚めるか分からないと。しかし、今は大丈夫。今は生きているよと、私も、このハッサンのメッセージを見ていつも思っています。彼は家を破壊されて大切な人を何人も失って、将来のことを考えると不安でたまらないと言っています。

これはハムディーです。



「この激しい攻撃の中、奇跡的に自分は生きている。この紛争は、全てのガザ人が爆撃か感染症で死ぬまで続く。これだけ多くの子どもと女性が亡くなる耐えがたい状況を、なぜ世界は許しているのか。」なぜ許しているのでしょうか。なぜ、この状況がこのように長く続くのでしょうか。皆さん、どう思われますか。なかなか答えが出ません。考え続けて答えは出ないと思いますが、現時点では、まだこの状況が続いています。

これは、11月に記者会見を行わせてもらって、その時にもお伝えした言葉です。私がハムディーに「明日、国境を越えるかもしれない」と言った時に涙ながらに伝えてくれたメッセージです。「自分たちがどんな悪いことをしたの。命の重さは皆、同じはずなのに、この世界はフェアにはできていない。世界中が自分たちを攻撃している。自分たちに人権なんてない。私たちは、本当にミゼラブルだ。」3月になって、テレビではほとんどニュースにも出ませんが、実際現地では過酷な状況が続いています。

このパレスチナ赤新月社のアミール。彼は23歳ですが広報担当で日赤の活動でも、いつも写真を撮りに来て協力してくれたメンバーです。彼はいつも笑顔で、にこにこ笑ってすごく協力的でした。これは彼が最後に送ってくれた動画です。

これはアルアマル病院という所で、ガザの真ん中、少し南部寄りにいますが、その周りが戦車で包囲され外に出られない状態が続いている中、彼は撮影を続けていました。広報として現地の状況を発信するために共有してくれましたが、ここから全然連絡が取れなくなりました。後で教えてもらったのは、この動画をシェアした数分後に撃たれて、頭をけがしてそのまま亡くなったということでした。たくさんの方が亡くなって、今でも、その数が増えている状況なのですが、私たちが今何ができるのか、今もずっと私は模索し続けています。

このように講演をさせていただき状況を伝えられることを考えています。一人ひとりの力はすごく小さいかもしれないけれど、一人ひとりが、今、起きていることを考えて行動すれば、何か一つ繋がるのではないかと考えて私自身も活動を続けています。

もう死者は3万4,000人です。どんどん、この数は増えていくばかりです。その中でも、今も現地で活動が続いていて、赤ちゃんが生まれています。病院が損壊して、全然使えなくなったので、野戦病院を新たに建て、そこで患者さんの受け入れを行っています。今しかできないこと、今しないといけないことは、皆さんに現地の状況を伝えることも一つです。

他には、例えば、国際人道法を正しく理解して、世界で何が起きているのか理解すること。是非、皆さんにも、今日、この出来事をご家族の方に伝えたり、一人でも多くの方々に伝えて、支援の輪

を広げていっていただけたらと思います。救援金も募集していますので寄付も一つの支援の形かなと思います。

大阪赤十字病院でも、自分たちにできることとして、去年、Not a targetキャンペーンを行いました。パンフレットには、パレスチナ・ガザの活動について書いてあります。Not a targetキャンペーンのところからYouTubeを是非見ていただけたらと思います。病院全体で、職員全体で取り組んでいます。

4月22日から病院でピースオリーブキャンペーンを始めました。オリーブの花言葉は平和です。木は私が描きました。患者さんと職員に葉っぱと実にメッセージを書いてもらい、葉っぱを付けて寄付につなげています。

最後に、衝突が起こって、自分の身の危険も感じながらの3週間半ではありましたが、私は本当に看護師で良かったとすごく思いました。いろいろな職種で現地に残っていた人もいましたが、その中でも、やはり患者さんにできることがあって、することで患者さんから感謝していただいたり、処置中「こんな辛いことがあってね」と話をしてくださったり、いろいろな思いを聞かせてもらいました。

生まれたばかりの赤ちゃんのケアにも呼んでいただいて、たくさんの方が亡くなっていく中で、このような小さな命に関わらせてもらい、本当に



看護師で良かったなと心から思いました。考えると、できることはたくさんあるなと思いました。

あと、もう一つは、本当に大変な中でも働き続ける現地のスタッフに心から敬意を表したいと思っています。

一日でも早く、ゆっくり、落ち着いて、穏やかに、明日の心配をせずに、明日が来るのかな、迎えられるのかなとか、そのような心配をせずに、ゆっくり大切な家族と一緒に眠れるような、平穏な日々が訪れることを心から願っています。一人でも多くの命を守るために、一人ひとりが、国際社会が最善を尽くすことを心から願います。

以上で発表を終わります。ご清聴、ありがとうございました。